

全能の神

今からお話しするスワミの奇妙なドラマを描いた出来事は、1964年のある時に起こりました。ある夜、プラシャーンティ・ニラヤムでのインタビューやバジャンがすべて終わった後、夜8時30分頃にカストゥーリ教授がアナウンスをしました。その夜、10時30分頃にひどい土砂降りの雨になるので、男性は全員どこか安全な場所で眠るように、また女性はマンディール（寺院）の中で眠ってもよいとのことでした。これらの指示はスワミからのものでした。

その当時、様々な形の建物の宿泊所はありませんでした。2階にスワミが住まれるお部屋のあるマンディールと、カストゥーリ教授のような人々のための小さな家屋と、郵便局の建物と、小さなキャンティーン（食堂）があるだけだったのです。キャンティーンの屋根はゆるんだ黒い石版で覆われ、しっかりと固定されていなかったため、雨が降ると水が流れ込み、座って食事をすることはできませんでした。マンディールの南の隅には印刷所もありました。これが、当時のプラシャーンティ・ニラヤムの建物の見取り図でした。

カストゥーリ教授のアナウンスを聞くとすぐ帰依者たちは夕食を済ませ、女性はマンディールの中へ、男性はどこか見つけた安全な場所へと移動しました。帰依者たちは揺るぎない信仰を持っており、スワミの指示でなされたこういったアナウンスは常に真実であることを多くの者が体験していました。当時、スワミは毎日たくさんの奇跡を見せてくださり、それらを目撃していた帰依者たちの神聖な恍惚感は限りないものでした。唯一残念に思うのは、当時、人々はスワミによってなされた無数の奇跡的な行いを体験し、味わっていたにもかかわらず、それらを他の人々に伝えたり、書き留めておいたりしなかつたため、将来の世代がそれらを知る機会を奪ってしまったことです。たまたまそこを訪れた人々だけでなく、訪れなかつた人々も含めれば、何十万もの帰依者たちに無数の不思議な出来事や奇跡が起こっていたに違いありません。それらのほとんどは記録されずに終わっています。ことによるとスワミのサンカルパ（ご意志）は、皆がそれらを知ることができるよう、再び開花させてくれるかもしれません！

午後10時30分きっかりに、真っ暗闇の空に雷鳴がとどろきました。土砂降りの雨が降り、すぐに地面は水であふれました。雨は午前3時まで降り続け、至るところで氾濫していました。チットラーヴァティー川は雨のために増水し、

マンディールの境内まで浸水してきていました！ すべての帰依者、特に一夜をさまざまな場所で過ごした男性たちは眠ることができず、夜が明けるのを心待ちにしていました！

私と友人は、スワミの印刷所のベランダをその夜の避難所にしていました。しかし、雨はベランダにも打ちつけていたので、私たちは片隅に寄り集まって座り、ナツメヤシの木の葉で作ったマットで身を守っていました。午前 3 時に雨がやんだ時、やっと起き上がり、体を伸ばして、その時までにはコチコチにこぼれていた足を動かすことができました。

早朝午前 5 時、人々は日常の務めにつこうと動き始めていました。雨水は低地に向かって排水されていましたが、あちらこちらに水たまりができていました。午前 6 時 30 分頃のことです。ある男女がマンディール近くでスワミを罵って大声で叫んでいるのを聞きました。何があったのかを確かめるため、私と友人はその場へ走りました。その当時、スワミのキャンティーンとは別に、マンディールの外にいくつかの茶店がありました。マンディールで叫んでいたのは、それらの茶店の一つを営む主人とその妻でした。

その夫婦は、自分たちの一人娘が土砂降りの雨の中で行方不明になったため叫んでいたのです。主人はタミル語とテルグ語の両方で、スワミを口汚く罵っていました。妻は自分の頭と胸を叩きながら、スワミに雑言を浴びせていました。苛立った主人は大声であざけるように叫んでいました。

「俺は自分の娘を失った。俺たちはあんたを神だと信じていたのに、裏切られた。あんたは俺たちの幸せの面倒を見ると言って、生計を立てるためにマンディールの前で茶店を開くように言った。今、たった一人の子どもを失って、あんたは俺たちにどんな幸せをくれると言うんだ？」

集まってきた帰依者たちは、その夫婦がスワミを罵っているのを聞いて戸惑い、同時に二人を気の毒に思っ言いました。「可哀想な人たち、どうすればいいんだ。彼らは一人っ子を失って、どうすればよいのかわからないんだ」

皆が、次にいったい何が起こるのかを待っていました！

スワミが上階のバルコニーにお出ましになりました！ 辺り一体がシーンと静まり返りました。スワミはその店主に呼びかけておっしゃいました。

「あなたは泥棒です！ あなた方は二人共、自分たちの不注意で子どもの世話をしなかったのに、ここへ来て大声で叫んでいます。行って、店の裏にある井

戸の中で子どもを捜しなさい」

そして、スワミはすぐに中へ入ってしまわれました。

その夫婦はもちろん、大勢の人々が小声でひそひそと話をしていました。

「井戸だって？ 井戸の中でどうやって子どもを捜すのだ？ たとえ子どもを見つけても、生きているのだろうか？」

至るところに水がよどんでいたのも、その井戸の場所を突き止めることさえ困難な仕事でした。多くの人々が水たまりを歩いて渡り、ついに井戸の胸壁のへりを探し当て、その井戸がスワミのおっしやった井戸に間違いないと判断しました。どうやって井戸の中へ降りるかを検討していた時、その能力のある人々が役目を買って出て、準備を整え、井戸の中へ降りていきました。辺り一帯では、ぼそぼそと低くささやく声が聞こえていました。遂に、井戸に降りた人々はその 5 歳の少女を水面まで引き上げました。周りにいた人々は、即座に少女の手を引っ張り、少女を引き上げました。少女は生きており、笑っていたのです！ ああ！ なんとという驚き！ なんとという不思議！ 周りに集まっていた人々は皆、叫び始めました。「サイ ラム！ サイ ラム！」

私たちは畏敬の念に打たれました。数時間もの間、35 フィートの深さの水中にいたにもかかわらず、その少女はまったく何の影響も受けずに通常の状態で見られたのです。人々が少女に尋ねると、少女は答えました。

「何ともなかったわ。あそこには水はなかったし、ババが私と一緒にいてくれたの！」

出典：『サナータナ・サーラティ』2012年10月号 P336